氏　名　（本　籍）	田中　佑
学　位　の　種　類	博　士（言語学）
学　位　記　番　号	博　甲　第　7202　　号
学位授与年月日	平成　27　年　3　月　25　日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審　査　研　究　科	人文社会科学研究科
学位論文題目	近現代日本語における新たな助数詞の成立と定着

主　　査	筑波大学 教授	博士（言語学）	沼田　善子
副　　査	筑波大学 教授	博士（言語学）	杉本　武
副　　査	筑波大学 教授	Ph.D.（言語学）	竹沢　幸一
副　　査	筑波大学 教授	博士（言語学）	矢澤　真人

論　文　の　要　旨

本論文は、近現代日本語において、名詞から新たに生じた助数詞の成立と定着の過程、および、それらに関わる諸要因を歴史的言語変化の観点から記述しようとするものである。

本論文は、以下の全８章から構成される。

序章　　研究の背景および目的と意義
第１章　日本語助数詞の定義と用法成立の認定基準
第２章　助数詞「-店」の成立と定着
第３章　助数詞「-店」の現代語における意味
第４章　助数詞「-試合」の成立と定着
第５章　助数詞「-試合」の現代語における意味
第６章　言語変化としての助数詞化
終章　　研究の課題および展望

序章では、問題の所在、先行研究の議論、課題を整理した上で、本論文の目的と意義が述べられた後、本研究で使用される言語データについての詳細が説明される。

第 1 章では、名詞と同じ形態を持つ助数詞について、先行研究の定義を批判的に検討し、新たに a. 数詞の後ろに直結し、数量詞を成す、b. 数が表現される名詞と共起し、かつ、副詞的位置に生起する、という定義を提案する。そして、名詞が生起できない副詞的位置に言及するこの定義は、先行研究では指摘されなかった名詞から助数詞への文法的性質の変化の判断を可能にすると同時に、歴史的文法変化としての助数詞化の認定基準にもなることが示される。

第２章、第３章では、日本語における名詞の助数詞化を大きく二つに分けた中の一つ「音訓の変化が

伴う助数詞化」の事例として、〖商業空間〗の数を表現する助数詞「-店」を扱う。

第 2 章ではまず、名詞「店（たな／みせ)」から助数詞「-店（てん)」への変化を、新聞記事等のデータを基に記述する。ここでは、名詞「店（たな／みせ)」（第 1 段階、1875 年以前）が、接尾辞「店（てん)」（第 2 段階、1880 年前後）に変化し、これが数詞と結びつく「数詞＋店（てん)」が、1895 年以降、「商戸」等と共起し、副詞的位置に生起することにより「-店」を助数詞として解釈するようになる過程を経て、助数詞としての用法を確立（第 3 段階、1895～1930 年）させたことが明らかにされる。加えて、この変化に対して、職住分離の社会の形成という言語外的要因を考えることで、それ以前に〖商業空間〗に用いられた助数詞「-戸」の用法縮小と助数詞「-店」の成立、定着が統一的に説明できることを主張する。

第 3 章では、「-店」の現代語における意味を、その成立過程および類義的助数詞「-店舗」との比較から分析し、「-店」が【職住一体】の＜場＞から切り離された【職】という＜営み＞の側面を持つ事物の数を表現する助数詞として成立したため、現代語においても、「-店舗」が＜場＞を重視するのに対し、「-店」は＜営み＞を重視するという意味特徴を有することを主張する。

第 4 章、第 5 章では、助数詞化の二つ目「名詞の形式を維持しての助数詞化」の事例として、〖スポーツの勝負〗の数を表現する助数詞「-試合」を取り上げる。

第 4 章では、言語調査から、「-試合」の具体的な成立時期の特定をせず、その成立を早くても昭和に入ってからと推察した上で、助数詞「-試合」の成立は、単独名詞「試合」から[シングル[六＋試合 $_{N}$] $_{N}$]（複合名詞、第 1 段階）等が、[シングル $_{N}$][六＋試合 $_{N\,or\,Q}$]（同格構造、第 2 段階）という解釈を経て、[シングル $_{N}$][六＋試合 $_{Q}$]（助数詞、第 3 段階）と解釈され、定着する変化によるものであると述べる。この際、第 1 段階から第 2 段階へは、「数詞と結合した「試合」が数量詞と解釈される」という再分析が、第 2 段階から第 3 段階への変化には、「数詞＋助数詞「-試合」が成す数量詞が数量詞構文に当てはめられていく」という類推が関与していることを主張する。また、助数詞「-試合」の成立・定着の要因には、近代スポーツの流入と普及という社会的要因と、そのすべてを的確に表現することのできる助数詞が存在しなかったという言語的要因が関与していると述べる。

第 5 章では、類義的助数詞「-戦」との比較から助数詞「-試合」の現代語における意味を分析し、助数詞「-試合」が名詞「試合」の「互いに相手に対して何かをする」という意味特徴を踏襲する一方で、「相撲や囲碁・将棋などは表現しにくい」という意味特徴も持つことを明らかにする。同時に、名詞の形態を維持して助数詞化している「-試合」等の要素に関する分析では、名詞と助数詞の間に、「数詞＋名詞」という中間段階を設定して分析を行う必要があることが示唆される。

第 6 章では、文法化と語彙変化との比較をとおして、「-店」「-試合」の二つの助数詞化の事例を歴史的言語変化全体に位置付けることを試みる。そして、助数詞化が、変化の特徴の面では文法化の特徴を示す一方で、変化のメカニズムの面では社会の変化が大きく関与する点で、名詞の新生といった語彙変化とも共通する側面を持つことを主張する。加えて、本論では扱わない外来語からの借用による助数詞の成立までを視野に入れると、助数詞化を含む新たな助数詞の成立と語彙変化の共通性はさらに明確になることを指摘し、今後の研究の方向性を提示する。

終章で本論の考察をまとめ、残された課題と研究の展望について述べる。

審　査　の　要　旨

１　批評

本論文は、近現代語において十分に解明されていない名詞から助数詞への言語変化のメカニズムを、膨大な言語資料の根気強く丹念な調査から実証的に考察し、丁寧に記述する点で、高い説得力を持った優れた研究である。特に助数詞の定義では、名詞と助数詞の文法的特徴の異なりを捉えた新たな提案がなされることで、当該の語の名詞から助数詞への変化を明確に捉えることを可能にした意義は大きい。また、本論文における「-店」「-試合」の助数詞化が、従来、言語変化の研究において別個に論じられてきた文法化と語彙変化の中間的性質を示す現象であることが示される点も興味深く、言語変化の理論的研究への貢献も小さくない。さらに、用例の出現動向とその背景にある社会状況の詳細な観察に基づく考察から、名詞の助数詞化を支えるものとして言語主体をとりまく社会の変化という言語外的要因が考えられることを指摘する点も、説得力がある。同時に、従来の研究を超える、より広い視野から言語変化の様相を捉える研究として高く評価できる。この考察から、助数詞化の現象を通して、言語主体が社会の変化に対応させながら言語を変化させていく、言語主体による言語活動の一端が浮かびあがる。

一方で、本論文では助数詞化を「音訓の変化が伴う助数詞化」と「名詞の形式を維持しての助数詞化」の二つに分け、前者の例として「-店」を、後者の例として「-試合」を取り上げて、名詞から助数詞への変化を体系的に捉えようとするが、この二語を扱うことの妥当性は必ずしも十分に説明されていない。また、この二語に対する考察のみでの体系的な議論の妥当性にも疑問の余地が残る。この点は、本論文の大きな課題と言える。今後、対象の語を広げ、多くの事例を考察することで、本論文の議論が検証、整備、深化されることが望まれる。加えて、現代語における類義的助数詞の異同の分析についての記述には、さらなる考察の深まりが望まれる部分も無くはない。「-店」と「-店舗」の意味領域の分布図、言語変化における助数詞化の位置を表す図等、本論文で示される概念図にも、議論との整合性から改善の余地が見られる。

しかしながら、こうした課題を残しつつも、本論文が近現代日本語における名詞からの助数詞化の研究、ひいては言語変化の研究に、新たな視点を加え、進展の可能性を開くものとして、高く評価される点はいささかも揺るがない。本論文の今後の発展が大いに期待される。

２　最終試験

平成 27 年 1 月 16 日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

３　結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は、博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。